

ニカラグアの今

中米ニカラグアで4月中旬に発生した、社会保障制度に関する法改正への反発と抗議デモが、短期間に暴動に発展した。抗議デモの激しさにすぐに法改正令が取り消されて一旦鎮静化したかに見えたが、5月中旬に反政府派学生の射殺事件が起きて再燃した。反政府側の道路封鎖、大学への立て籠もり、デモ行進と、鎮圧側の催涙弾、銃器などを用いた弾圧と攻撃が繰り返された。

減速する経済状態の中で、国旗や応援ラップが飛ぶように売れていた。渋滞が続く交差点には多くの売り子が集まり、子供から大人まで総出で商売をする家族も見かけた。外国人旅行客は激減し、一部の地方では



ガソリンや生鮮食品の流通が途絶え、治安の良さが魅力であった国の様相が大きく変化した。そんな暗い雰囲気が漂う中でも、反政府のロゴTシャツを警察本部前で堂々と売るおばちゃんや、まるでサッカー観戦でもしているかのように応援ラップを吹き、国旗を振るデモ参加者を見ると、この国の人々のしたたかな底力を感じる。事態が好転することを願っている。(宮内崇博)

“アールディーアイ通信 No. 98/2018”から

写真: 渋滞している道路を売り歩く

ニカラグア・マナグア 2018年

アサード

パラグアイでは休日、家族で焼肉をして過ごす習慣がある。中南米ではこうした焼肉をアサードと呼んでいる。牛肉の大きな塊にレモンを絞って塩を振る程度のシンプルな味付けを施して、中までしっかりと火を通したものを分厚く切り分けるのがパラグアイ流だ。時々、カウンターパートに呼んでもらい、ご家族と庭先や郊外の公園でアサードをして過ごすことがあった。各家庭、肉の部位に拘りがあり、また焼き方にもコツがあるようで、もっぱら男性の仕事とされる。この国では人の数より牛の数の方が多いと言われるだけあって、日本と比べ牛肉は格段に安い。午前中から肉を焼き始め、土地のビールや安ワインを飲みつつ、あるいはテレレとい



う冷たいマテ茶を回し飲みしながら雑談に興じ、昼過ぎになって焼き上がった箇所から食べ始める。脂の少ない赤身肉はいくらでもお腹に入り、ハンモックに寝そべっていると自然に日が暮れる。彼らは金を掛けずに贅沢をする術を心得ている。アサードも様々なものがあるが、焚火で炙り焼きにすると燻し香が付いて絶品だ。(木村 剛)

“アールディーアイ通信 No. 97/2018”から

写真: カウンターパートの親戚など20人くらいが集まったアサード

パラグアイ・アスンシオン郊外 2014年

エルケという管楽器

アルゼンチンの北西端に位置するフワイ州の州都サン・サルバドール・デ・フワイは、アンデス山脈の麓にあって標高が1200メートルを超える。緑豊かなこの町にある州経済開発生産省の農林開発部で花卉栽培技術協力の仕事に従事した。

職場に州知事の視察があり、フォルクローレのバンド演奏が付いた焼き肉(アサード)パーティーが催された。中盤に差し掛かり、ボンボの奏者が楽器を替えて3~4メートルもある長い笛を吹き始めた。初めて見る楽器で、スイスのホルンに似ている。吹き方が異なり、ホルンは先端を地につけるが、こちらは先端を思い切り高く掲げる。重さに耐えて吹奏する宴会芸のような感じである。音は、牛がブオーっ、ブオーっと唸っているようだ。音よりも曲よりも、この体勢でいつまで吹き続けられるかと気が気でなかった。2曲演奏して相当に疲れた様子だった。



写真:天井まで高く上げて吹き続ける奏者

アルゼンチン・フワイ州 2018年

通常は、高く支えて手助けしてくれる人が要る。奏者によれば、エルケ(Erke)と呼ばれる薄い金属のパイプで出来た楽器で、演奏後はいくつかのパートに分けてコンパクトにすることができる。もともとは葦の茎をつなげて作り、使い続けると吹き口が曲がってくるので、吹き口だけブリキにしたらしい。“エルケ”はケチュア語由来で、同じように呼ばれる楽器がポリビア、チリ、ペルーにもあるらしい。(及川義明)

“アールディーアイ通信 No. 96/2018”から

パラグアイで見つけたトランプカード(ナイペ)

1990年代前半、コロンビアで長期の仕事をした時期、ナイペというトランプに似たカードゲームでカウンターパートやホームステイ先の人達と遊んだことがある。食後の団欒の時や人が家に集まった時に、あるいは旅先に持って行って遊ぶ。熊本県で教員をしている友人が人吉の伝統文化も研究テーマにしている、「ウンスカルタ」が話題に上がった。よく似たものがコロンビアにあったと私が伝えたところ、興味を持った。「ウンスカルタ」は、室町時代末期にポルトガルの船員たちから伝わったトランプゲームで、日本流に作りかえたカルタである。江戸時代寛政期の贅沢や遊興の禁止を潜り抜け、人吉球磨地方に残り、熊本県は遊戯方法を重要無形民俗文化財に指定している。



写真:棍棒、剣、コイン、杯が描かれている パラグアイ・アスンシオン 2015年

その後パラグアイに出かけることが度々あって、中南米は各国共通のものが多くコロンビアにあるものはパラグアイにも必ずあると考えたのが当たり、アスンシオンの昔ながらのおもちゃ屋さんで見つけた。メイドインチャイナであったが、とにかく土産に持ち帰ることができた。

人吉市鍛冶屋町通りの街並み保存と活性化を目的とする会が2003年以来、ウンスカルタの復興を目指す活動を始め、毎秋、全国大会が行われているそうである。(木村 剛) アールディーアイ通信 No. 85/2018”から

キリマネのカーニバル

カーニバルはカトリックの行事で「謝肉祭」とも呼ばれ、イースター（復活祭）期間の前に行われるお祭りである。モザンビークの中部に位置するザンベジア州の州都キリマネでは、毎年2月に国内最大規模といわれるカーニバルが行なわれ、今年は2月2日から11日まで開催された。カウンターパートに誘われて土曜日の夕食後に訪ねた会場は、夕方に降った雨で足元が悪かったが、最終日前日ということもあって、夜が深まる



につれ見物人がぐんぐん増えた。町の中心部にある広場を囲むように並んだ屋台で、ビール、ソフトドリンクや鶏の串焼きなどが売られ、ピーナツやカシューナツツを売り歩く人もいる賑わいであった。

カーニバルというと、メインストリートを音楽に合わせて踊り練り歩くイメージだが、キリマネのカーニバルでは、学校や企業単位の若い男女20名くらいのチームがお揃いのTシャツなどを着て、順番に広場の中を踊りながら一周する。観客も独自のパフォーマンスで仮装をしている。最終日は出場チームがステージの上で踊るコンテストがあり、一番盛り上がる。初めて見たキリマネのカーニバルは、こじんまりとした感じで、リオのカーニバルのような派手さはないが、会場にあふれる熱気を体感することができた。（大竹雅洋）

“アールディーアイ通信 No. 94/2018”から

写真:シマウマを表現しているのか？

ザンベジア州・キリマネ 2018年

パプアニューギニアの結婚式

JICA パプアニューギニア(PNG)事務所で机を並べた PNG 人同僚の結婚式に参列した。同僚は、首都から車で8時間ほどかかる村の出身であるが、結婚式は首都ポートモレスビーで執り行われ、私を含めた JICA 事務所の日本人スタッフも招待された。会場は屋外に椅子を並べただけのシンプルなものであったが、新郎側から新婦側に送る贈答品が会場に山と積まれて披露され、壮観であった。贈答品は、バナナ、ブアイ(ビートルナツツ)、サツマイモ等の作物のほか、生きた豚4頭、米、小麦粉、コーラ等の飲料、日用品のクーラーボックス、バケツ、タライ等々とにかく品数と量がおびただしい。ビートルナツツとは檳榔樹の種子のことで、キン



マというコショウに似た植物の葉で少量の石灰とともにくるんで噛む。

PNGでは女性の地位が低く、UNDPのジェンダー開発指数でも常に下位に位置するが、結婚の際には、新郎側が新婦側に大量の贈り物をするのが慣習らしい。以前に仕事で滞在したインドやネパールでは新婦側が新郎側にいわゆる“嫁入り道具”を貢がなければならない、女性側が大変な思いをするのとは対照的なのが興味深かった。（矢野史俊）

“アールディーアイ通信 No. 93/2018”から

写真:新郎新婦と大量の贈答品

ポートモレスビー 2017年